

ふりがな 氏名	くらた りょうこ 倉田 亮子	職名	講師
取得学位	修士(看護学)	学会での受賞歴	なし
主な担当科目	老年看護援助論Ⅰ・Ⅱ、老年看護学実習、地域ふれあい実習、看護研究ゼミナール、看護の統合と実践実習		
所属学会	日本看護科学学会 日本看護医療学会 日本看護診断学会 日本看護研究学会 日本ヒューマンヘルスケア学会		

◆ 教育業績

事 項	実 施 年月(日)	概 要
成人看護学演習	平成 30 年 4 月～令和 元年 7 月	成人期にある対象の健康レベルに応じた看護実践を学ぶため、周手術期にある患者(術直後、術後 2 日)、慢性疾患を抱える患者(増悪期、寛解移行期)の 2 事例それぞれ 2 場面を作成し、その状況に合わせた看護過程展開、シミュレーション教育を行い、根拠に基づいた判断力及び実践能力の育成を行った。看護過程の展開はスモールグループで指導し計画立案まで進み、技術演習では更に小グループに編成し、学生 4～5 名に教員及び臨床講師 1 名の指導体制をとり計画実施後の評価を行う。演習の場面では、ジグソー型のグループワーク方式により実施後の振り返りとして学生同士共有の場を設けている。教材では、演習の進め方や学習方法を明記したガイド、講義・演習資料を毎年作成し、Moodle により演習毎の評価や授業評価アンケートを実施している。ガイドや講義資料について、アンケートの評価や教員の意見を取り入れ、検討を重ねている。
領域別看護学実習(成人セルフケア・成人クリティカルケア)	平成 30 年 4 月～令和 2 年 2 月	これまで学習した看護学の知識・技術・態度を統合し、個別性のある看護を実践するため、第 1 教育病院(藤田医科大学病院)と連携して実習を構成している。クリティカルケア実習では、周手術期にある患者の看護を実践または体験するため、対象患者に合わせて病棟→手術室→集中治療室→病棟と移動しながら実習ができ、ER や CCU,ICU での見学も実施している。セルフケアでは、疾病構造の複雑化や患者の高齢化に対応するため病態理解を深めること、生活者として患者を捉えること、家族ケアも含め多様な社会資源の実際を知るため、外来部門の見学も実施している。教材では、実習目標や詳細な学習方法・内容を明記した実習要項を毎年作成し、実習評価では、臨床指導者にも評価していただき、学生は実践した技術は自立度、経験の有無について評価している。平成 28 年からは呼吸器内科・外科、循環器内科・外科、消化器内科・外科、内分泌内科、感染症内科、腫瘍科、腎内科、回復期リハビリ科病棟等にて主にセルフケア実習を担当し実習指導を行っている。

事 項	実 施 年月(日)	概 要
看護研究方法	平成30年4月～令和元年12月	看護研究を通して、より良い看護を探求する課題解決の能力を向上させるため、研究活動の基盤をつくるための指導を行っている。年2～3名の学生を担当し、科目評価を行っている。臨床看護学実習や日々の疑問・興味などから学生が研究課題に挙げた内容を焦点化し、基本的な研究手法に基づいて調査研究、文献レビューを進めていく。研究計画書には倫理的配慮の具体的な内容を明記し、学内の倫理審査を受ける。研究成果は論文作成、抄録作成、発表資料作成、発表を行い、一連の過程を経験できるよう指導を行っている。
成人セルフケア方法論	平成30年4月～令和元年7月	慢性疾患を抱える人への支援の基盤となる諸理論や概念を提示し、障害受容やセルフマネジメントが必要な対象の理解と看護実践について講義している。講義内で看護の実際を考える機会をつくるため、疾病の動向や疾患看護についてレポート課題を課している。また、紙上事例での看護過程展開(NANDA-I 概念枠組使用)をスモールグループで指導し、対象の個別性を考慮した看護計画の立案、教育支援計画立案を実施している。また、疾患をもつ患者を具体的にイメージ化するため、臨床講師に講義を依頼し、学生の興味を引き出している。講義で使用する事例、講義資料を作成し、Moodle による授業評価アンケートを実施している。平成25年は疾患別看護として循環器と生体防御機構障害、排泄障害をもつ患者の看護について講義を担当したが、平成26年からは科目責任者として科目を構成している。
成人がん・難病・ターミナル看護方法論	平成30年4月～令和2年2月	セルフマネジメントを必要とする、及び人生最終段階にある患者の特性に応じた看護実践について講義している。がん疾患をもつ患者の周手術期、回復期や終末期にある患者の看護について、看護診断過程から看護計画立案までの思考過程をスモールグループで指導を行い、判断力の育成を図っている。治療過程の理解を深めるため、薬物療法や放射線療法については認定看護師に講義を依頼しており、その点については学生の興味と学習意欲を引き出していると評価されている。平成27年から看護過程のグループワーク指導と教材として事例、講義ガイドの作成を担当していたが、令和1年は科目責任者として講義資料、新規事例作成、講義構成を行った。

事 項	実 施 年月(日)	概 要
リハビリテーション看護	平成 30 年 4 月～令和元年 7 月	急性期から維持期におけるリハビリテーションを必要とする対象を理解し、その具体的な援助方法について講義する。担当は、循環器疾患、呼吸器疾患、脊髄損傷後、運動機能に障害をもつ患者の看護について機能障害から急性期リハビリテーション、維持期のリハビリテーション、セルフケア再獲得に向けての支援方法を講義した。講義資料は Moodle 上に提示し、講義毎に確認テストを行った。
基礎ゼミ	平成 30 年 4 月～令和 2 年 3 月	学科 1 年生を対象としており、アカデミックスキルズ獲得のため、スモールグループ指導により、根拠に基づいた課題対応能力やコミュニケーション能力の育成を目指している。平成 31 年はワーキングメンバーとして指導要項、ルーブリック作成、講義・演習を行った。
アセンブリ教育としての学外活動	平成 30 年 4 月～令和 2 年 3 月	藤田医科大学独自のアセンブリ教育の一環として、学部・学科 2 年生を対象とし、学生の社会人基礎力構築のための自主的活動において、学外活動を行うチームを担当した。平成 27 年より大学近郊の老人施設にて利用者を対象にレクリエーションを企画し、実施した。平成 29 年～平成 31 年には、豊明市の産業支援課からの要請を受け、花マルシェ企画の商業活動と連携し、企画展やイベントで PR 活動や物販販売支援などの活動を行っている。市民からも学生の活動で活気がでるなどの評価をいただいている。また、平成 30 年より学部学科全体の演習として、各学科 1 名ずつで構成したグループにて、患者を取り巻く環境理解、多職種連携を学ぶ実習を行っている。担当は、活動推進委員として運営を行っており、教材では実習要項や記録物を作成した。
老年看護援助論 I	令和 2 年 9 月～令和 5 年 2 月	2 年生後期の科目として、高齢者の生活機能の変化や及ぼす影響について、正常な身体の構造や機能を振り返りながら加齢によりどう変化するかを考え、そこから必要となる看護について講義を行った。また、加齢に伴って影響が大きくなる「身体を動かすこと」、「排泄すること」、「身体の清潔を保つこと」「安楽な体位を保つこと」など日常生活行動に対し、その人に合わせた効果的な支援方法を見だし実践することをねらいとして、技術演習を構成した。グループワークとして、生き生きと楽しく充実した生活を過ごすために高齢者に対するアクティビティケアについて学生同士で実施案を作成し、披露する機会を設けた。

事 項	実 施 年月(日)	概 要
基礎ゼミナール	令和 2 年 9 月～令和 3 年 1 月	初年次教育として、健康科学部 2 学科の 1 年生を対象に小グループでのグループワークを行った。大学で学ぶアカデミックスキルを学修し、専門職に必要な基礎知識を基に自ら問いをたて、問題解決技法を用いて結論を導きだすため、科学的思考力を養うことを目的とした。グループワークでは、共感的、批判的に他者の意見を取り入れ、自己の考えを述べることも学習課題とした。評価基準にはグループワークの成果発表と個人のレポート課題提出を盛り込んだ。
老年看護援助論Ⅱ	令和 3 年 4 月～令和 5 年 2 月	3 年生前期の科目として、疾患をもつ高齢者、認知機能の低下のある高齢者に対する看護過程の展開技法薬手のためのグループワーク、嚥下機能障害に対する食事援助・口腔ケア、コミュニケーションスキルに関する看護技術演習を構成した。看護過程では脳梗塞後嚥下障害をもち、リハビリ期にある高齢者、認知機能低下による不安、帰宅願望、易怒性などのBPSD症状のある高齢者の事例を作成し、計画的に学習が進められるよう演習ガイドを作成し、段階的に課題提出にて学習状況の確認を行った。また、追加学修が必要な学生には、個々の課題を把握し、講義時間外において学習指導を行った。
基礎看護学実習Ⅱ	令和 3 年 8 月	2 年生の科目として、看護活動の場において、さまざまな健康段階にある対象の最適健康状態を達成するための基本的な看護の方法を習得するため、実習指導を行った。病院という非生活圏での日常生活を整えるため、食事や移動、排泄の援助技術、対象者の安全を守るための環境整備について体験を通して学習することで、今後の学習意欲の向上を目指す機会とした。
老年看護学実習	令和 3 年 9 月～令和 5 年 3 月	3 年後期の領域別看護学実習科目として、医療施設および介護老人保健施設、在宅サービスを利用しながら生活している高齢者および家族に対して看護過程の展開を実践する。対象理解として、今まで歩んできた生活史や背景を踏まえ、対象者を全人的に理解し、人生の最終段階にある高齢者の日常生活の維持・向上や QOL の向上を目指したエンド・オブ・ライフケアについての学びを深める機会とする。グループは学生 5～6 人で構成し、1 教員が 2 週間の実習期間を担当するため、学生個々の学習進度に応じて個別指導を行い、実習目標の達成を目指した。また、臨床指導者とのカンファレンスを毎日実施し、学生の疑問や気づきに対する問題解決やフィードバックを密に行うことで、臨床判断能力や看護観を養う機会とした。新型コロナ禍で施設から受け入れ困難な状況があったが、代替実習として学内で事例展開、シミュレーション演習を行い、対象学生では概ね実習目標到達に至った。

事 項	実 施 年月(日)	概 要
看護研究ゼミナール(卒論)	令和4年4月～令和4年11月	看護学科4年通年科目として、卒業研究を通して看護研究の意義や文献活用方法、論文の書き方などの看護研究方法を習得し、看護を探究する姿勢の基盤となる科学的思考と研究に対する基本的態度を養う機会とする。担当学生は2名であり、臨地実習での疑問を研究動機とした認知症患者のBPSDに関する文献検討、術後せん妄予防に対する看護援助に関する文献検討を行い、研究計画書の作成から、論文作成、結果報告会に対して指導を行った。また、同時に看護師国家試験対策として計画的に学習する計画を立案させ、定期的に確認、評価を行うことで、学生は目標達成に至った。
看護の統合と実践実習	令和4年7月	看護学科4年生の前期科目として、自己の課題を探究してきた既習の実習を振り返るとともに、さらにこの課題を探究する姿勢を活かし、実務に即した複数の患者を受け持ち、知識や技術を統合した看護実践について、1グループ5名の学生の指導を行った。また、多職種との協働・連携をしながらチーム医療の在り方を多角的な視点でとらえること、組織としての看護管理、医療安全、災害看護、チーム医療等に係わる専門看護師の役割を学ぶとともに、自己の看護観を確認する機会とした。

◆ 研究業績

区 分	著書・論文・発表テーマ・ 作品・演目などの名称	単 ・ 共	発 行・ 発 表 年月(日)	発行所 / 誌名・巻号 / 学会・展覧会・演奏 会の名称(会場名)	備 考
著 書	満点獲得！看護師国家試験完全 予想模試2020年版 (ISBN978-4-415-22946-1)	共	平成30年9月 令和元年9月	成美堂出版	編著：三吉友美子、藤原郁、山田静子 著者：倉田亮子、他28名 試験問題形式で作成されているため、1回目午前・午後、2回目午前・午後問題にそれぞれ分散され総合的な頁番号は振られていない。
	第27回一般社団法人日本看護研究学会東海地方会学術集会抄録集	共	令和4年3月	一般社団法人日本看護研究学会東海地方会事務局	学術集会会長：粕谷恵美子 事務局：倉田亮子、他14名
論 文	人工関節置換術を受けた高齢者の日常生活の工夫とQOLの関係(査読付)	共	平成30年7月	日本ヒューマンヘルスケア学会誌,3(2)	倉田亮子、八島妙子 p.11-22

区 分	著書・論文・発表テーマ・ 作品・演目などの名称	単 ・ 共	発 行・ 発 表 年 月(日)	発行所 / 誌名・巻号 / 学会・展覧会・演奏 会の名称(会場名)	備 考
学会発表	医療現場での専門職連携教育としての“アセンブリ IV”の試み(ポスター発表)	共	平成30年7月	第50回日本医学教育学会大会(東京)	伊藤美保子、大橋鉦二、中井滋、倉田亮子、後藤和恵、三吉友美子、大槻眞嗣 医学教育, 49(1), p179